

Than Wh-Relative + NEG構文の随伴現象に関する覚え書き

長崎大学教育学部 松元浩一

0 はじめに

Than Wh-Relative + NEG構文（以下、TWN構文）は、次に見られるように、形容詞の比較級と否定語と共に用いられて最上級の意味を表す⁽⁰⁾。

- (1)a. Hillis Miller, than whom no one is better placed to judge, told the Modern Language Society of America that by the mid-1980s critical theory had shifted from invoking ‘language’ . (BNC⁽¹⁾)
- b. Dr Lowth, than who no better English Grammarian has existed, was an excellent Poet, a great Latinist, a famous Grecian, and a good Hebrician. (DENG: 276)
- c. Here then was the making of a new war, different from that of Word on Stone:; a sectarian war, than which none can be more bitter nor more cruel. (BNC)

本稿では、thanの後に続く関係代名詞のうち、特にwhoとwhomの随伴 (pied-piping)現象について考えてみたい。以下では、TWN構文の歴史的背景、文体・統語上の特徴、分布を概観したのち、それをもとに本構文の随伴現象に関する問題を検討する。

1 歴史的背景と文体・統語上の特徴

Görlach (1999)は、これまでほとんど論じられることのなかったTWN構文とその変異形を様々なコンピューター・コーパスを用いて検索し、論文末に興味深いデータが付すとともに、その分布や文体上の特徴について考察している。

本構文はそもそもゲルマン諸語にはない統語形式で、初例はOEDによると1340年⁽²⁾、ラテン語の統語法に倣った、形式ばった文体に用いられると言われる。初例から推察すると中英語の終りにはすでにこの構文は存在していたと考えられるが、英語史上特徴的に多く見られるのは初期近代英語期であり、現代英語でも、頻度は少ないとはいえ、文語に散見される。初期近代英語期に特徴的に見られる理由のひとつに、ラテン語やルネッサンスに因る影響が挙げられる。すなわち、当時はラテン語の文体を理想とし、英語の文体をそれに似せようと試み、関係代名詞を頻用したために、この時期に本構文の頻度が高くなったと考えられる⁽³⁾。また、TWN構文が英語特有の表現であると言われるのは、本構文に見られる随伴現象そのものが、ドイツ語、オランダ語、スウェーデ語、ノルウェー語、デンマーク語等の現代ゲルマン諸語には存在しないことと無関係でない⁽⁴⁾。

2 分布

主に18世紀の初期文法家 (Early Grammarians)や19世紀の文法家たちはTWN構文の関係代名詞 (whoとwhom) の分布に関して主格形が正しいと主張する⁽⁵⁾。

(2)

(2)a. whoを支持する 文法書	Lowth (1762), Baker (1770), Murray (1795, 1837), Postlethwaite (1795), Walker (1805), Angus (1812), Lennie (1815), Cobbett (1818, 1823), Lewis (1821), Lennie (1821 ⁶ , 1838 ¹⁹) P. Smith (1824), Hiley (1832), Latham (1841), Mulligan (1852), Fleming (1869), Gow (1892), Nichol (1978), ‘Anglophil’ (1892), West (1893), Fowler (1906, 1930)
(2)b. whomを支持 する文法書	Harris (1777), Crombie (1802), Meilan (1803), Taylor (1804), Hazlitt (1810), Grant (1813), Alexander (1822), Churchill (1823), Pinnock (1828), Smart (1841), Harrison (1848), Brown (1851), Clarke (1853), Mason (1858), MacMullen (1860), Bain (1863), Alford (1863), Brewer (1877), Hall (1880), Kelke (1885), L.T. Smith (1886), Sonenschein (1889), Brockington (1895), Macmillan (1897), Carpenter (1889), Nesfield (1898, 1903), Sweet (1891–98), [Krapp (1927), Evans & Evans (1957), Copperud (1957), Follet (1966), Dekeyser (1975)]

上の表から、関係代名詞は「規範的には」主格であるべきだという見解が存在した、と明確に読み取れるが、一方では目的格とする考えも多く存在する。言うまでもなく、ここには、thanを接続詞とするか前置詞とするか、その解釈をめぐる見解の相違が潜んでいる。そこで、実際の分布を Görlach (1999)が収集した資料をもとに分析してみると以下のような結果になる。

(3)

時期 / 関係代名詞	who	whom	TOTAL ⁽⁶⁾
1500–1599	1/36 (2.8%)	4/36 (11.1%)	36 (100%)
1600–1699	2/206 (1.0%)	66/206 (32%)	206 (100%)
1700–1799	4/138 (2.9%)	60/138 (43.5%)	138 (100%)
1800–1899	0/148	98/148 (66.2%)	148 (100%)
1900–1992	0/40	22/40 (55.0%)	40 (100%)
TOTAL	7/568 (1.2%)	250/568 (44.0%)	568 (100%)

また、初期文法家たちの見解が分かれる 18、19 世紀の資料を上の結果とは別に収集してみると次のようになる⁽⁷⁾。

(4)

時期 / 関係代名詞	who	whom	TOTAL ⁽⁶⁾
1700-1799	0	2/4 (50%)	4 (100%)
1800-1899	0	4/27 (14.8%)	27 (100%)
1900-1993	0	7/23 (30.4%)	23 (100%)
年代不詳	0	2/4 (50%)	4 (100%)
TOTAL	0	15/58 (25.9%)	58 (100%)

上に示した資料は必ずしも網羅的とは言えないが、ここでの考察を支持する証拠としては十分である。つまり、(2a)に見た主格関係代名詞を主張する一部の初期文法家たちの考えは、当時の文法思潮は反映していても⁽⁸⁾、(3)(4)から明らかのように、言語事実からは乖離していると言わざるを得ない。また、この構文については以下のような記述も見られる。

(5)a. With a personal or relative pronoun in the objective case instead of the nominative (as if *than* were a preposition). This is apparently the invariable construction in the case of *than whom*, which is universally accepted instead of *than who*. With the personal pronouns it is now considered incorrect. (*OED:than*, 1b) [本項目の初例は1560年]

b. Originally “than” was not a conjunction but an adverb. In Modern English it has been further developed into a preposition. (Nesfield & Wood (1964: 92))

周知の通り *than* は本来は副詞であり後に接続詞として使用されるが、(2b)から(5)に見るとおり、近・現代英語に入ると更に前置詞としての用法も発達させた⁽⁹⁾。次節ではこの発達過程を経た現代英語の随伴現象について考えてみよう。

3 随伴現象に関する問題

TWN構文は(6a)タイプよりも(6b)タイプのほうが頻度が少ないことを先に見た。

(6)a. Hillis Miller, than whom no one is better placed to judge, told the Modern Language Society of America that by the mid-1980s critical theory had shifted from invoking ‘language’. (=1a)

b. Dr Lowth, than who no better English Grammarian has existed, was an excellent Poet, a great Latinist, a famous Grecian, and a good Hebrician. (=1b)

まず、(6b)の現象について見てみよう。一般に、*than*比較節は節頭に前置できないことが知られている。

(7)a. *[_C Than Mary], I like Bill more.

b. *[_C Than beautifully], certainly Mary sings more loudly.

c. *[C' more than John gives to charity], Mary contributes to campaigns.

また、以下のように、接続詞thanに導かれる節や句は付加部なので、通例その中から要素を取り出すこともできない。

(8)a. *I don't know the man whom Mary knows a girl [behind t].

b. *I know a girl who Mary is brighter [than t].

c. * Who is Mary taller [than t is] ?

すなわち、(6b)のWh句は関係代名詞なのでCP節の指定部へ移動しなければならないが、(8)のような取り出しは許容されないため、以下の付加部の例と同じように、「義務的な」随伴によりthan節全体が節頭へ移動されたと考えられる。

(9)a. [Whose pictures] did you see t ? (cf., * Whose did you see [t pictures] ?)

b. [Under what circumstances] did you meet John t ?

(cf., *What circumstances did you meet John [under t] ?)

他方、(6a)のthanは前置詞だが、(9b)と同じく付加部全体を移動することはできるので、義務的な随伴によりthan whomが節頭へ移動されている。Mustanoja(1960)が示すように、随伴は定形節に関してはMEの頃にその存在がしばしば確認されているので⁽¹⁰⁾、英語史上早い時期から一般的な規則として定着していたと考えられる。換言すると、(6)は(7)(8)のように付加部を成すのでその内部からの取り出しは許容されないものの、史的発達過程において既に一般的な規則として定着していた随伴に拠って付加部全体が取り出されているので(9)の事実とも矛盾しない。それにもかかわらず、(6a)と(6b)の間に明確な使用頻度の差が見られるのは何故であろうか。次の例を見てみよう。

(10). [ppThan John], certainly no one has done more. (Napoli (1983: 683))

thanが前置詞の場合、(6a)の他に(10)も許容される。これらを(7a)と較べてみると、同じ付加部でもthanが前置詞の場合(6a)(10)のように容認度が高く、また、(3)(4)に見たとおり、使用頻度も高い。しかし、(6b)ではthanが接続詞なので、(7)に同じく許容されず、頻度も極めて少ない。このような相関はthanの後の、空所 (gap)の有無と無関係でない。

Radford (1997: 140)は移動可能な要素について以下のように述べている。

(11). (when moving constituents) move the smallest constituents possible.

この「経済性の原理」により、移動可能な要素は「最小の構成素」でなければならない。(6a)の場合、前置詞句全体が最小の構成素として移動される。(6b)の場合、比較節内からWh句は取り出せないで、動詞句の空所を含んだ節全体を移動することになる。

(12)a. [CP [PP than whom]_i C [IP . . . t_i]

b. [CP [C' than [IP who [VP e]]]_i C [IP[IP . . .]t_i]]

仮に動詞句の空所を残してthanとwhoだけが移動すると、(13)のように移動した部分は「最小の構成素」を成していないので経済性の原理に反する。

(13). [CP [C' than [IP who I]_i] C [IP [IP . . .]t_i [VP e]]]

つまり、(6a・b)は、共に「経済性の原理」と先に見た付加詞条件を満たした形式であると言える。しかし両者の頻度には大きな違いが見られる。次の提案を見てみよう。

(14)a. E[empty] C[ategory] disallows pied-piping, i.e.,

b. Pied-piping requires phonological content. Chomsky (1999: 19)

これに従って、音声形式を持たない空範疇はPFでの解釈上音声形式をもつ移動要素に随伴できないと仮定すると、(12b)は、その空所がどんな空範疇であれ、容認されないことが予測され、(12a)との使用頻度が異なることも説明できるように思われる。逆に(6b)の構造は(13)であると仮定すれば、(14)の制約には従っているものの、経済性の原理には違反する。従って(6b)は付加詞条件と経済性の原理を満たす(6a)より頻度が低いと説明できる。

4 むすび

これまで、TWN構文の二つの変異形間に観察される使用頻度と分布の違いを随伴と絡めて論じてきた。動詞句の空所(または空範疇)を含む随伴現象は、理論上PFでの解釈可能性に係わる問題を引き起こすことが予想されるために現代英語では全く見られず、かつても僅少であったと考えられる。ここでは紙面の都合上、問題解決の方向を概略的に述べてきたが、無論、これ以外の現象に関して3節での議論には問題が残ることも考えられる。しかし、そのことについては今後の課題として次の機会を待たなければならない。

註

0. TWN構文にはいくつかの変異形が見られるが、本研究においては(1)に示した否定語を含む随伴形式に限定して議論を進めることにする。(cf., Görlach, 1999: 86)
1. BNC: British National Corpus.
2. 1340 Rolle, Richard, Psalter. XXXVII. 15 “As aran than the whilk na thyng is febler.” (OED)
3. cf., Görlach (1999: 14-23)。初期近代英語期にTWN構文が多く見られることについては、特に、この時期を対象にしたコンピューター・コーパスの種類の多さと容積の大きさに因る可能性もある。
4. cf., Görlach (1999: 15-16); Kjellmer (1988: 562); Culicover (1997: 183, 222)
5. cf., Görlach (1999: 25ff); Dekeyser (1975: 216-7)
6. TOTALは関係代名詞Who、Whom、Which (主格形と目的格形)の合計頻度を表す。
7. 資料はThe Modern English Collection at the University of Virginia ElectronicText Center 及びHTI Public Domain Modern English Text Collection at the University of Michiganのコンピューター・コーパスより収集。
8. cf., Görlach (1999: 20)
9. thanが前置詞として発達した過程は次のような事実から推測できる。
 - (i)a. John eats as fast [as pigs do].
 - b. John eats as fast [as a tornado]. (cf., *John eats as fast [as a tornado does].)
 - (ii)a. John is taller [than I am].
 - b. John is taller [than six feet]. (cf., *John is taller [than six feet is].)
 (ib) (iib)はいずれも動詞句の省略があるとは考えられないので、asとthanは前置詞句を形成している。つまり、[_C than [who [_{VP} e]]]が[_{PP} than whom]へと拡張し、(3)や(4)が示す結果に至ったと予測される。このような拡張により、現代英語ではthanのあとの統語範疇は文ではなく、名詞句である傾向が強い(cf., Pinkham (1996))。

10. 例えば、this folk of which I telle you soo (Mustanoja (1960: 197)), その他に、Kjellmer (1988: 562f), Blake (1992: 387ff)を参照。

参考文献 (抄)

- Blake, N. (ed.)(1992) *The Cambridge History of the English Language Volume II 1066 – 1476*. Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1999) Derivation by Phase. MIT Occasional Papers in Linguistics 18. MITWPL.
- Culicover, P. (1997) *Principles and Parameters*. Oxford University Press.
- Dekeyser, X. (1975) *Number and Case Relations in 19th Century British English*. Uitgeverij De Nederlandsche Boekhandel.
- DENG: *A Dictionary of English Normative Grammar 1700–1800*. John Benjamins.
- Görlach M. (1999) *Aspects of the History of English*. Universitätsverlag C. Winter.
- Kjellmer, G. (1988) “ ‘What a Night on Which to Die!’ on Symmetry in English Relative Clauses,” *English Studies* 69-6, 559–68.
- Mustanoja, T. (1985) *A Middle English Syntax Part I. Parts of Speech*. Reprinted edition. Meicho Fukyu Kai.
- Napoli, D. (1983) “Comparative Ellipsis: a Phrase Structure Analysis,” *Linguistic Inquiry* 14, 675–94.
- Nesfield, J.C. & T. Wood (1964) *Manual of English Grammar and Composition*. Macmillan.
- Pinkham, J. (1996) “A Computational Approach to the Comparative Construction,” *CLS 32: The Main Session*, 299–309.
- Radford, A. (1997) *Syntax: A Minimalist Introduction*. Cambridge University Press.